

「地理的知識」の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師

“Geographical Knowledge” and American Female Missionaries in Meiji Era Japan

齋藤元子 Motoko SAITO

第1章 研究の目的と方法

1. 研究の目的
2. 研究の方法
3. 先行研究
4. 論文構成

第2章 女性宣教師誕生の背景

1. 女性の領域（woman's sphere）と教会
2. 南北戦争と女性
3. 女性海外伝道協会の成立
4. 女性宣教師の誕生
5. フィーメール・セミナリーにおけるエマ・ウィラードの地理教育

第3章 明治初期におけるアメリカ人女性宣教師の日本報告

1. はじめに
2. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会と日本伝道
3. 機関誌 *Heathen Woman's Friend*
4. *Heathen Woman's Friend* にみる日本関係記事
5. 女性宣教師作成の日本に関するテキスト
6. 一女性宣教師のみた明治初期の日本
7. おわりに

第4章 アメリカ人女性宣教師の蝦夷探訪記

1. はじめに
2. メアリー・ホルブルックについて
3. メアリー・ホルブルックの蝦夷探訪
4. 外国人の内地旅行
5. メアリー・ホルブルックのみた蝦夷
6. メアリー・ホルブルックの蝦夷探訪記の特徴
7. おわりに

第5章 明治後期におけるアメリカ人女性宣教師の日本報告

1. はじめに
2. ジョージアナ・ポーカス

3. 女学校教師時代のポーカス

4. *In Journeyings Oft : A Sketch of the Life and Travels of Mary C. Nind*

5. ポーカスの日本報告
6. ポーカスのみた日露戦争
7. おわりに

第6章 アメリカ人女性宣教師の邦文出版活動と海外旅行記

1. はじめに
2. 常磐社の出版活動
3. 月刊誌『常磐』
4. 明治期の女性雑誌ジャーナリズムと『常磐』
5. 『常磐』掲載の海外旅行記
6. 海外旅行記の内容とその特徴
7. おわりに

第7章 アメリカ人女性宣教師設立女学校の特色

1. はじめに
2. 海岸女学校の誕生
3. 明治期の女子教育
4. 海岸女学校の様相
5. 海岸女学校の特徴
6. おわりに

第8章 アメリカ人女性宣教師設立女学校における地理教育

1. はじめに
2. 明治前半期におけるコーネルの地理書による地理教育
3. コーネルについて
4. アメリカにおけるコーネルの地理書の評価
5. ウィラードからコーネルへ
6. 高等女学校令以降の地理教育
7. 女性宣教師の海外旅行記と外国地理教科書
8. おわりに

第9章 結語

本論文は、地理学者モナ・ドモシユ (Mona Domosh) の提唱した「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述 (feminist historiography of geography)」の一つの実践として、明治期に來日したアメリカ人女性宣教師を「地理的知識」の伝達者・普及者と位置づけ、その活動を地理学的視点から論じることを目的とする。

「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述」は、地理学史を「地理学」というアカデミックな一学問領域の歴史から、探検家などの業績をも包摂する歴史へと書き換える試みにおいて、女性の業績を正当に評価すべきであると主張する。

第1章では、本論文のキーワードとなる「地理的知識」を次のように定義づけた。「地理的知識」は「地理学的知」に対比する用語である。「地理学的知」が地理学者という職業集団の構成員によって提示され、認知された知識であるのに対して、「地理的知識」は、日常生活や経済・文化活動を通じて、広く一般社会に伝達される知識であり、その発信者は地理学者と呼ばれる集団に限定されるものではない。また「地理的知識」は、宣教師・探検家・旅行家らが発見もしくは見聞した事象なども包摂するものである。本論文は、女性宣教師という集団がこの「地理的知識」をいかに収集・発信したか、そして、その内容はどのようなものであったかを、明らかにするものである。

第2章では、女性宣教師誕生の背景を示した。南北戦争時の社会奉仕活動を契機として、19世紀後半、アメリカの中流白人女性たちは、プロテスタント教会の教派ごとに女性海外伝道協会を結成し、多数の独身女性宣教師をアジアやアフリカの異教地に送り出した。來日した女性宣教師の多くは、19世紀アメリカに発展した女子中等教育機関フィーメール・セミナリー出身の教師経験者であった。フィーメール・セミナリーは、科学系諸課目の教育を重視し、なかでも、地理を「最初に学ぶ科学」と位置づけていた。同校の創設者であり、女子教育のパイオニアと称されているエマ・ウィラード (Emma Willard) は、自ら地理教科書を作成し、各地の学校を訪問して、地理の模範授業を行った。このように地理教育に力を入れていたフィーメール・セミナリーに学んだ女性宣教師たちは、地理ならびに地理教授法に関する十分な知識を習得していたといえる。よって、本論文が「地理的知識」の伝達者・普及者として着目す

る女性宣教師の活動は、専門的地理教育を修めた上に成立した活動であったとみなすことができる。

第3章から第8章においては、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会により日本に派遣された女性宣教師を事例として、著述活動と教育活動の二側面から、彼女たちの日本における活動を考察した。女性宣教師は、二種類の活動を通して、二つの方向に「地理的知識」を発信していた。一方は、日本に関する「地理的知識」のアメリカへの発信であり、もう一方は、世界に関する「地理的知識」の日本への発信である。前者は、女性宣教師の日本報告が女性海外伝道協会機関誌に掲載されるという方法で伝達された (第3章～第5章)。後者は、女性宣教師が日本で刊行した邦文女性雑誌に自らの海外旅行記を掲載するという方法と女性宣教師が設立した女学校において地理教育を実施するという方法によって伝達された (第6章～第8章)。

第3章では、明治初期における女性宣教師の日本報告について論じた。初期に來日した女性宣教師は、日本の面積・人口・地形・気候・植生・政治・経済・文化などを概説した系統地理的報告や東京・横浜・函館・長崎の四開港都市についての地誌的報告などを行っている。女性宣教師が提示した「地理的知識」は、当時のアメリカで普及していた地理関係書が記述していない幕藩体制の崩壊や明治天皇に関する情報を含んでおり、開国期の日本に関する正確な情報をアメリカにもたらした点においても、評価できるものである。また、女性宣教師の日本報告には、ヴィクトリア期の中産階級の女性が共有していた規範・教養・良識が反映されている。植物や衛生・健康問題についての知識は、ヴィクトリア期の女性が身につけるべき教養とされていた。報告にみられる日本の植生や衛生環境などの細かな記述は、女性宣教師のこれらトピックに対する関心の高さと知識の豊富さを示している。

第4章では、1881 (明治14) 年女性宣教師メアリー・ホルブルック (Mary Holbrook) によって書かれた蝦夷探訪記について論じた。この探訪記は、1878 (明治11) 年に蝦夷を旅した英国人女性旅行家イザベラ・バード (Isabella Bird) の旅行記との共通点と相違点が認められる。両者の共通点として第一に挙げることができるのは、日本人男性を従者として雇い、各地で様々な厚遇や特

権的保護を受けながら、馬で辺境を旅する姿勢である。いずれの旅にも、不平等条約下の日本におけるジェンダーを問わない人種間の力関係が存在する。つまり、両者は、人種に基づいた権力構造に依拠して、本国では実行が困難である冒険的旅を遂行し、自らのジェンダーの解放を体験したといえる。

両者の相違点としては、バードがアイヌの観察に没頭し、蝦夷の近代化にまったく興味を示していないのに対して、ホルブルックは、アイヌの紹介のみならず、蝦夷がアメリカを手本に、北海道として近代化されていく様子を伝えている点が挙げられる。ホルブルックの旅のルートは、同年に実施された明治天皇の北海道巡幸のルートと極めて類似していた。北海道巡幸は、開拓使の諸事業が一定の成果を取めたことを天皇に実見させるためになされた。この点からも、ホルブルックの旅が、蝦夷の近代化に触れる旅であったといえることができる。ホルブルックは、天皇の北海道巡幸にも言及しており、蝦夷が日本の周縁に位置しながらも、日本帝国の一部として統治されていることをアメリカに示している。バードは蝦夷を「西欧の影響を少しも受けていない地方」として、西欧世界の対極に位置づけた。これに対して、ホルブルックは、蝦夷の風景をアメリカ西部のメタファーを用いて描写し、アメリカと日本の連続性を表現している。同じヴィクトリア期の白人女性でありながらも、英国とアメリカという属性の違いにより、蝦夷の捉え方に明らかな相違が認められる。

第5章では、明治後期における女性宣教師の日本報告について論じた。明治後期になると、日本の時事問題を扱った報告が出現してくる。その報告の多くは、女性宣教師ジョージアナ・ボーカス (Georgiana Baucus) によって書かれている。ボーカスは、女性宣教師設立女学校の教師として勤務した後、出版活動を展開するために再来日した人物である。ボーカスが最も多く報じた時事問題は、日露戦争である。ボーカスの報告には、出征兵の見送りや慰問袋の作製など、社会的奉仕活動に尽力する女性たちの姿が詳細に記されている。それらの活動は、ボーカスにとって、南北戦争時のアメリカ人女性による奉仕活動を思い起こさせるものであったと推測できる。南北戦争は、アメリカ人女性の組織的社会的活動の契機となった。日露戦争下の日本人女性による社会的活動を報じるこ

により、ボーカスは、第4章で取り上げた女性宣教師ホルブルックと同様に、日本を正反対の他者と位置づけるのではなく、アメリカから日本に繋がる連続性を主張しているとみることができる。

第6章では、女性宣教師の邦文出版活動と海外旅行記について論じた。女性宣教師が伝達した「地理的知識」は、アメリカ人女性の外国に対する関心を喚起し、一般女性雑誌にも、異教地の社会や文化を紹介する読み物が頻繁に掲載されるようになる。女性宣教師が日本で創刊した月刊邦文女性雑誌『常磐』は、女性宣教師自らが記した海外旅行記を連載し、ほぼ毎号巻頭に配置した。これは当時日本で発行されていた女性雑誌には例のないものであり、アメリカ女性雑誌の影響を受けていることが明らかである。女性宣教師による日本に関する「地理的知識」のアメリカへの伝達は、世界に関する「地理的知識」の日本への伝達という道を切り開いたといえる。

女性宣教師の海外旅行記は、二つの注目すべき特徴がある。一点目の特徴は、日本との対比的な記述である。書き手の女性宣教師は日本人ではない。にもかかわらず、彼女たちは、比較や喩えに適した日本の事象を選択できるだけの日本地理に関する知識を有していた。このことは、女性宣教師の「地理的知識」の伝達者・普及者としてのレベルの高さを証明している。二点目の特徴は、『常磐』が国内の時事問題を論じることが許可されていない雑誌であったにもかかわらず、海外における宗教や人種間の対立、女性の社会進出など時事問題と呼びうるトピックを取り上げている点である。この点において、海外旅行記は、料理欄や育児欄との相対的な比較から、『常磐』の記事の中で最もラディカルであったといえる。

第7章では、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会により、日本で最初に設立された女学校である海岸女学校を事例として取り上げ、女性宣教師設立女学校の特徴を論じた。明治期にアメリカ人女性宣教師により設立された女学校は、19世紀アメリカに発展した女子中等教育機関であり、多くの女性宣教師の出身校でもあるフィーメール・セミナリーをモデルとしていたことは、すでに指摘されている。海岸女学校も、その指摘に該当する特徴が認められる。当時のアメリカの男子中等教育機関は、ギリシャ語・ラテン語といった古典語教育に重きを置き、それらを男性的な課目

とみなして、女性が学ぶことに難色を示した。フィーメール・セミナリーは、その対抗措置として、科学系諸科目をカリキュラムの中心に据えた。海岸女学校においても、地理・物理・化学・天文・博物・動物・植物・地質といった科学系の課目が教授され、これらの課目はいずれもアメリカの教科書が使用された。なかでも、地理は第一学年の初学期から教授され、地理を「最初に学ぶ科学」と位置づけたフィーメール・セミナリーの教育理念の継承が認められる。

第8章では、女性宣教師設立女学校における地理教育について論じた。海岸女学校の地理教育には、アメリカ人女性地理教育者サラ・コーネル (Sarah Cornell) が執筆した地理書が用いられた。コーネルの地理書は、19世紀後半のアメリカで広く普及した教科書シリーズであり、マクロスケールからミクロスケールへと展開する地図を用いた問答による段階的教授法を特徴とする。女性宣教師は、生徒との英語による問答を通じて、「地理的知識」を伝達したとみなすことができる。

アメリカにおけるコーネルの地理書の普及期は、ベスタロッチ主義の全盛期と重なる。ベスタロッチ主義地理教育は、生徒の身近な環境から学習を開始する *home geography* をその特徴の一つとするが、コーネルの地理書は *home geography* を採用していない。女性宣教師がコーネルの地理書を地理教科書として選択した要因は、*home geography* を取り入れていない点にあったと考えられる。なぜならば、アメリカ人にとっての *home geography* は、日本人の *home geography* にはなり得ないからである。開国期の日本の地理教育に求められたのは、交流の始まった諸外国について知らしめることである。地球の概略から学習を開始するコーネルの地理書は、その要求に適合した教科書であったといえる。

1899 (明治32) 年の高等女学校令公布以降、海岸女学校の地理教育は、文部省検定の外国地理教科書が使用された。しかし、同時に女性宣教師は、第6章で取り上げた邦文女性雑誌『常盤』に連載する女性宣教師の海外旅行記をも教材として利用したと考えられる。その内容は、外国地理教科書がほとんど記述していない社会・文化的なトピックが中心であり、外国地理教科書を補足する役割を果たしていたことが推測される。

海岸女学校における地理教育は、明治20年代

を境として、前半はアメリカの地理教科書を使用した英語による「地理的知識」の習得、後半は海外旅行記を活用した「地理的知識」の習得という特徴を見出すことができる。前半は、多くの女性宣教師の出身校であり、彼女たちが地理の専門教育を受けたアメリカの女子中等教育機関フィーメール・セミナリーの影響が、カリキュラム上の位置づけや教科書選択において認められる。後半は、外国地理教科書から得られる知識を補うものとして、女性宣教師の著した海外旅行記が用いられた可能性が認められる。

第9章の結語では、女性宣教師が収集・発信した「地理的知識」の特質ならびに「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述」からみた「地理的知識」の伝達者・普及者としてのアメリカ人女性宣教師の地理学への貢献をまとめた。

女性宣教師が収集・発信した「地理的知識」には、三点の特質が認められる。一点目は、女性と子どもについての多角的な観察である。この特質は、「女性のための女性の仕事」というスローガンを掲げて、女性宣教師派遣という活動を、財源的にも、実務的にも、教会に依存せずに、女性のみで展開した女性海外伝道運動のオリジナリティーの主張とみることができる。二点目の特質は、衛生学や植物学に関する豊富な知識である。この特質は、19世紀ヴィクトリア期の中流白人女性が共有する知識や教養の反映とみることができる。三点目は、日本の政治状況や天然資源などに関する詳細な情報である。この特質は、キリスト教の布教活動に必要な知識を示しており、女性宣教師がその収集にも関与していたとみることができる。

上記の三点の特質のうち、一点目と二点目は、男性中心の教会権力への対抗や差異化から生まれた特質である。これに対して、三点目は、キリスト教布教に必要な知識という16世紀の大航海時代以来、キリスト教会が構築してきた知の体系に基づくものである。つまり、教会への従属から生まれた特質である。教会権力への抵抗と従属という二つの相反する姿勢から生まれたこれらの特質は、女性海外伝道運動の抱えていた矛盾を象徴するものともいえる。

本論文が実践を試みた「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述」からみた「地理的知識」の伝達者・普及者としてのアメリカ人女性宣教師の地理学への貢献は、以下の三点にまとめることができ

る。一点目は、幕末・明治初期の日本に関する正確な「地理的知識」をアメリカに伝達した点である。当時アメリカで普及していた地理書や地理教科書には、徳川幕府が国を統治しているといった記述が依然みられた。女性宣教師は、このような誤りを指摘し、正確な情報を伝えている。

二点目は、アメリカならびに日本の女性に対して、海外への関心を喚起した点である。女性海外伝道協会機関誌に掲載された女性宣教師の異教地報告は、一般女性雑誌に海外情報を掲載するという企画を促した。そして、日本における女性宣教師発行の邦文女性雑誌も、アメリカ女性雑誌のスタイルにならい、日本の女性雑誌にはみられない海外旅行記を掲載した。この展開は、女性宣教師による草の根運動的な「地理的知識」の普及活動といえるものである。

三点目は、明治期の女子中等教育における地理教育を推進した点である。アメリカ人女性宣教師が設立した女学校は、女性宣教師の出身校フイーメル・セミナリーをモデルとしたが、「地理＝最初に学ぶ科学」との位置づけも踏襲され、アメリカの地理教科書であるコーネルの地理書などを用いた地理教育が実施された。女性宣教師設立女学校は、明治前期における日本の女子中等教育を担った学校である。したがって、明治期の日本の地理教育への女性宣教師の貢献は、大きかったといえる。

19世紀後半のアメリカに展開された女性海外伝道運動は、女性参政権獲得運動と比較して、その保守性が指摘されてきた。しかし、アメリカと日本の女性に「地理的知識」をもたらし、世界への目を開かせた女性宣教師の著述・教育活動は、啓蒙的な解放運動と呼ぶことができる。

初出誌一覧

- 齋藤元子(1999)：19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動。お茶の水地理 40：33-38。
- 齋藤元子(2000)：“アメリカ人女性宣教師の異教地報告”研究序説 - Feminist Historiography of Geographyへの位置づけとして -。お茶の水地理 41：19-24。
- 齋藤元子(2001)：米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による明治期の日本における文書活動 - 雑誌『常磐』を中心として -。ウェスレー・メソ

- ジスト研究 2：37-54。
- 齋藤元子(2002)：明治初期におけるアメリカ人女性宣教師の日本報告。歴史地理学 44(3)：22-38。
- 齋藤元子(2002)：翻訳史料「函館とアイヌ集落」 - 明治期来日アメリカ人女性宣教師の蝦夷探訪記 -。お茶の水地理 43：77-84。
- 齋藤元子(2003)：アメリカ人女性宣教師メアリー・ホルブルックの蝦夷探訪記。人間文化論叢 5：33-41。
- 齋藤元子(2003)：ジャーナリストとしてのジョージアナ・ボーカス - 米国メソジスト監督派教会女性宣教師。ウェスレー・メソジスト研究 4：151-165。
- 齋藤元子(2004)：海岸女学校 - 青山学院の源流 -。築地居留地研究会編『近代文化の原点 築地居留地 Vol.3』93-102。亜紀書房。
- 齋藤元子(2005)：師範学校編纂『地理初歩』とその底本。地理学評論 78(6)：413-425。

さいとう もとこ

1995年4月お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科比較文化学専攻入学
2006年4月よりお茶の水女子大学大学院附属人間文化研究所研究員、明治学院大学・東京女子大学・女子栄養大学非常勤講師